

信 毎 歌 壇

小島 なお選

いい時もあつたんだなあ。満開の百合70本庭に咲いている (佐久市) いわむかし
食べ終えし皿の絵柄の転倒をそと正立させて置く (坂城町) 柄沢 満則
この国の驕りを覆ふ御簾ありや宝くじ売り場に顔は見られず (須坂市) 東郷 雄二
六十と五年生きて知らず居たパピコアイスを食する手順 (長野市) 金井 秀保
村の名に松の字ありき今はもう松食い虫に村も枯れたり (高山村) 春日きみ子
大相撲見終えて床に就いたまま逝きし祖父いま一四〇歳 (千曲市) 大谷 善邦
薔薇の漢字いびつなれど合っている幼笑顔冷房入れる (佐久市) 大場 和晴
ドア開けば優先席の空いている 年寄る我も座って良いのです (松本市) 集 真藍
庭の草掻けば野太き土器片がつぶやくとく世に顔を出す (佐久市) 篠原 敬子
雷雨去り戻る日さしに石灯籠は湯煙を上げて佇む (飯田市) 池田 健一

佳作
急用と呼び出し音は確実に鳴っているけど何を託卵を狙う郭公啼き止めて不気味な静寂訪れにけり (松川村) 岡 豊村

選 評

第一首、「いい時」とは時代とも、人生のある時期とも。過ぎ去った良きいつかとして群生する百合の花時を眺める。第二首、食べ終えて絵柄が出現したことで「転倒」を知ったのだ。一皿の豊かな

食時間。第三首、「宝」を売る人の顔は隠されている。御簾の向こうを決して覗いてはいけない。第四首、こんなささやかな場所にも手順がある。そして何年生きてもささやかな日々に新しい発見がある。

米川 千嘉子選

多数決に〈家族〉の行方を委ねる皇居の空のぼつかり広し (飯山市) 市村紀久子
カータリも笹に揺れる野点なり七夕人形古き着物で (松本市) 川久保恵子
ドブネズミを「うつくしい」と歌ふガールズバンド汗は飛びちり床をぬらしつ (安曇野市) 細川 恒
50%のピナス50%のビーチサンダル晩夏 (松本市) 美甘 歆
戻らない嗅覚に堪え食む三食コロナ後遺症五年目の夏 (長野市) 金井 秀保
母さんは死んであません父さんは死んであません鈴の音がし (塩尻市) 藤森 円
留鳥となりし一羽のジョウビタキ何か淋しげに度々飛ぶ (麻績村) 塚原ふじ子
娘がくればピンクの薔薇の愛しさ五十二以上咲き吾をみつめる (小諸市) 尾沼美枝子
何しても亡くした犬の声聞こえ涙流れる老いたるこの身 (安曇野市) 吉口 広子
電話口自分の意見言い過ぎを切って気づいて電話し直す (東御市) 竹内 幸彦

佳作
地下のマグマののぼり来たりし富士山の痛みのことし痛風なるは (長野市) 原田 浩生
変わりなき七月の日のルーティーン緑の中に貴女はいない (辰野町) 矢島あさ子

選 評

第一首、皇位継承や皇族の問題では当事者が蚊帳の外。〈家族〉と言い直されることでそのことの問題点や矛盾、人間の権利についてあらためて考えさせられる。第二首、松本の七夕人形の独特さが

浮かんで楽しい。第三首、女性だけのバンド。私も聞いてとくに歌詞に惹きつけられることが多い。社会への抵抗感を歌っているのだろう。第四首、すべて五割引きの夏。楽しさも五割引きだったか。

小池 光選

知らぬ間にボツリと落ちしこの涙テレビに流るヨイトマケの唄 (信濃町) 吉沢 英夫
朝散歩三つの神社と菩提寺にただ手を合やす頭を垂れて (長野市) 渡辺 和代
テラスにて海の夜明けを見てをれり生まれかはれる予感を浴びて (安曇野市) 細川 恒
我が町を流るる川の名は「湯川」出で湯なきまま千曲に注ぐ (御代田町) 柳沢 光雄
遠き日の故郷の山に見えしと狐の嫁入り我は見ざりき (飯綱町) 坂井 寿男
富山より葉背負つてきし人に紙風船をもらいし日浮かぶ (千曲市) 関 津和子
炎天に背筋を立ててあるきゆくをみなを見るは涼しかりけり (長野市) 原田 浩生
かそけくも軒に鳴りつく風鈴に目くらまばかりの真夏の光 (長野市) 近藤 光子
帰り来り川を渡りし人達みなきゆうりの馬にて待つ人の辺に (上松町) 藤原 邦子
猛暑の朝スイッチ押せば唯一の働きもののわが洗濯機 (長野市) 原田りえ子

佳作
老犬の二声吠えて逝きし朝抱きし膝に尿の温もり
楽園にカップヌードルは無いだろう打撃花火も殺虫剤も (松本市) 美甘 歆

選 評

第一首、6月に91歳で亡くなった美輪明宏さんを偲ぶ歌。ふしぎな歌手だったが、その歌声には人生の真実がこもっていた。哀悼。第二首、毎朝三つの神社とお寺に参拝する。なかなかできないこと。

特別なことを祈らず、ただ頭を垂れるというところが深い。それでいいのだ。第三首、海辺のホテルのテラスか。水平線からのぼってくる太陽をひとり凝視する。すばらしい光景に息をのむ。